



## 子どもの熱中症の特徴

近年の夏は、最高気温が人の体温を超えるのが当たり前となり、40度を超えてもあまり驚かなくなりました。国連事務総長の言葉にあるように「地球沸騰化の時代」に入ったのでしょうか。今回は、子どもの熱中症の特徴と対処法です。

子どもは汗をかく能力が未熟なので、皮膚の血流を増やして、体から熱を逃すことで体温を調節しています。また、体重に対する体表面積が大きいため、周りの環境温度の影響を受けやすく、熱しやすく冷めやすいという特徴があります。そのため気温が皮膚温より低ければ体の表面から熱を逃すことができますが、気温が皮膚温より高い場合には、子どもは大人より体温が大きく上昇して熱中症になりやすいのです。

子どもの体調の変化には周りの大人が気づいてあげなければなりません。ポイントは顔色と汗のかき方です。子どもの顔が赤く、大量に汗をかいているときは体温が上昇し熱中症のリスクが高いと考えて、涼しい場所に移す、体を冷やす、経口補水液を補給するなどの対応をしてください。

### 水筒を持ち歩くときの転倒事故

水分補給のために持たせた水筒で思わぬ事故が発生しています。転倒したときに首や肩にかけていた水筒がお腹にあたって、内臓を損傷(脾臓損傷、膵臓損傷、小腸破裂)するという事故が医療機関から何例か報告されています。

子どもは転倒しやすく、転倒の際に手をつくといった動作が取りにくい、お腹周りの筋肉が薄いなどの理由で転倒の際に内臓損傷がおこりやすいとされています。子どもに水筒を持ち歩かせるときのポイントは以下の通りです。

- ①水筒はなるべくリュックサック等に入れる。
- ②水筒を首や肩にかけている時は走らないようにする。
- ③遊具等で遊ぶときは、水筒を置いて遊ぶようにする。



### 7月の感染症情報

7月は高熱がでる夏風邪(エンテロウイルス属感染症)がほとんどを占めていました。その他、夏風邪の一種で口内炎を伴うヘルパンギーナ、アデノウイルス感染症、溶連菌感染症、感染性胃腸炎などが散見されました。RSV、ヒトメタ、新型コロナ、インフルエンザは姿を消しました。



### 7月の利用状況

7月の利用延べ人数は95人、1日平均利用人数は4.3人でした。年齢別では、1歳児が18人で最も多く、次いで2歳児、3歳児が同数で18人でした。疾患別では急性上気道炎が50人で最も多く、次に急性気管支炎21人、感染性胃腸炎8人の順でした。急性上気道炎は高熱がでる夏風邪が多く、ほとんどは1~2日で下熱していました。

今年の猛暑は今治でも37度を超えるような暑さです。万全の熱中症対策を心がけてお過ごしください。